

奈良国立文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部
1989.12.2

当調査部では寺域確認および史跡整備の資料を得るために山田寺跡の第7次・南門地区の発掘調査を実施中である。

- ・所在地 桜井市大字山田
- ・調査期間 1989.10.12～継続中
- ・面積 1150㎡
- ・地形 南北に細長い2枚の水田(東が70cm高い)

検出した遺構

南門 花崗岩製の礎石6個と礎石抜き跡6個が残り、正面3間(9.1m)、側面2間(5.2m)の建物となる。正面の柱間寸法は中央間が11尺、両脇間が10尺である。礎石は南面の2個のみに円形柱座を造り出す。棟通りの礎石には扉の軸をうける軸摺穴があり棟通りの3間全てに扉が設けられたことになる。基壇は縁に榛原石や花崗岩を並べた簡単なつくりで東西は11.7m、南北は7.9m、高さは0.1~0.5mである。また、基壇の外周には幅1m~1.5mの犬走りがめぐる。

大垣 上面幅約3mの基壇を伴う掘立柱塀で門より東で3間分、西で5間分を検出。柱は2本残り、柱直径は24~28cmである。屋根には瓦が葺かれ、土壁となっていたと推定される。柱間は2.38m等間、塀の南と北には雨落溝が設けられる。

参道 南から南門に至る参道と南門から中門に至る参道を検出した。南の参道は溝心々距離10mで素掘りの側溝があり、路面幅は約8.5m。北の参道は東縁石のみであるが、幅2.2m前後に復原できる。

東西溝A 南門のすぐ南にあり基幹排水路と考えられる。当初幅3mの素掘り溝であったものを、奈良時代に南門基壇の正面幅にあわせ溝の両岸を石で護岸する。幅1.3m、深さ1m。南門の中央間部分のみに橋を設ける。橋脚は一辺20cm前後の角柱4本が残り、柱間は東西1.3m、南北1.1m。

東西溝B 調査区の南にある幅1mの素掘り溝で参道の側溝と合流する。この他に斜行溝1、東西溝2、土坑3と柱穴などがある。

出土遺物

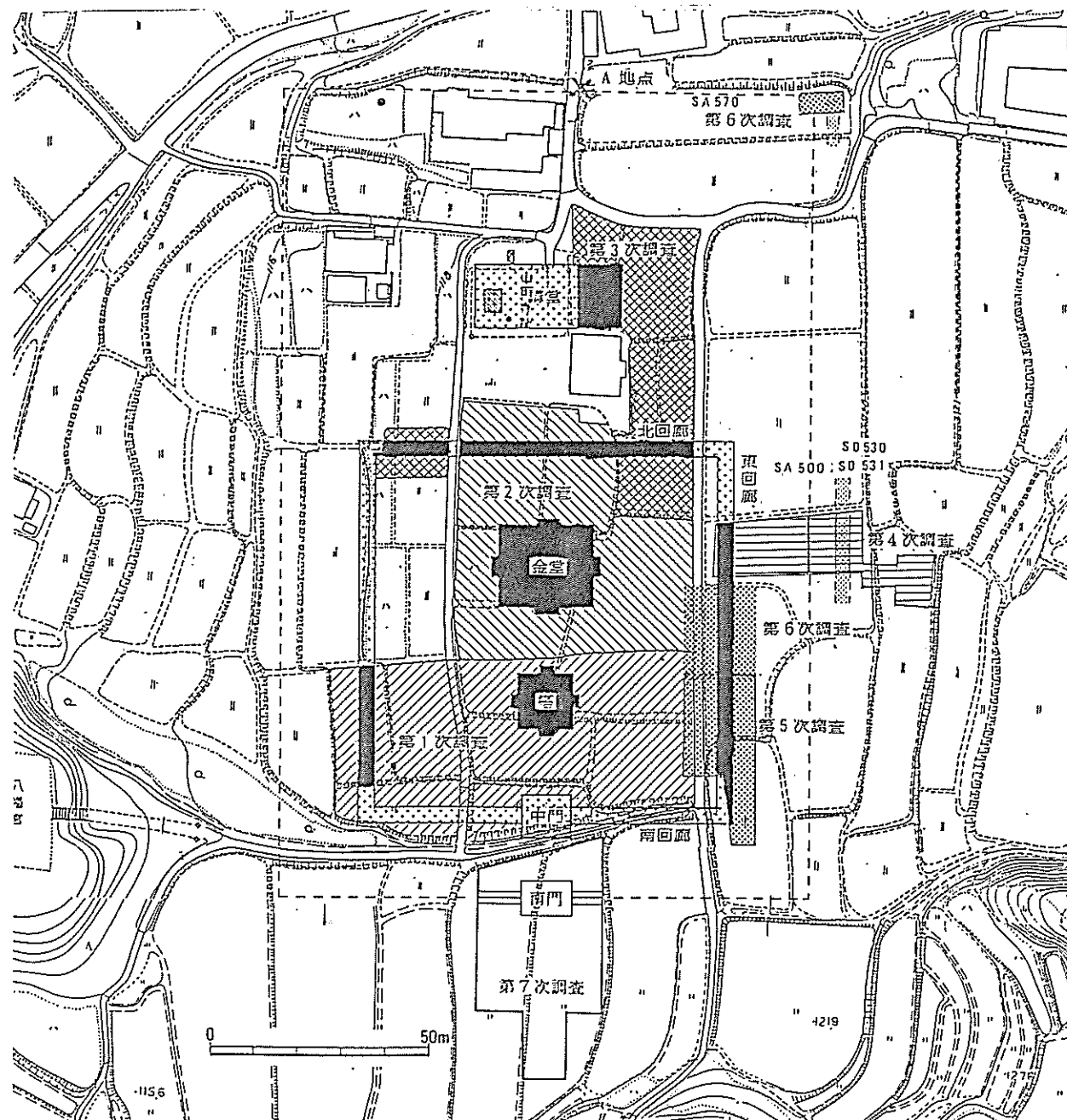
大量の瓦埴類のほか銭貨、土器、土製品、金属製品、木製品、石製品などがある。なかでも奈良時代後半の土師器皿の底部に「山田寺」と記した墨書土器が注目される。

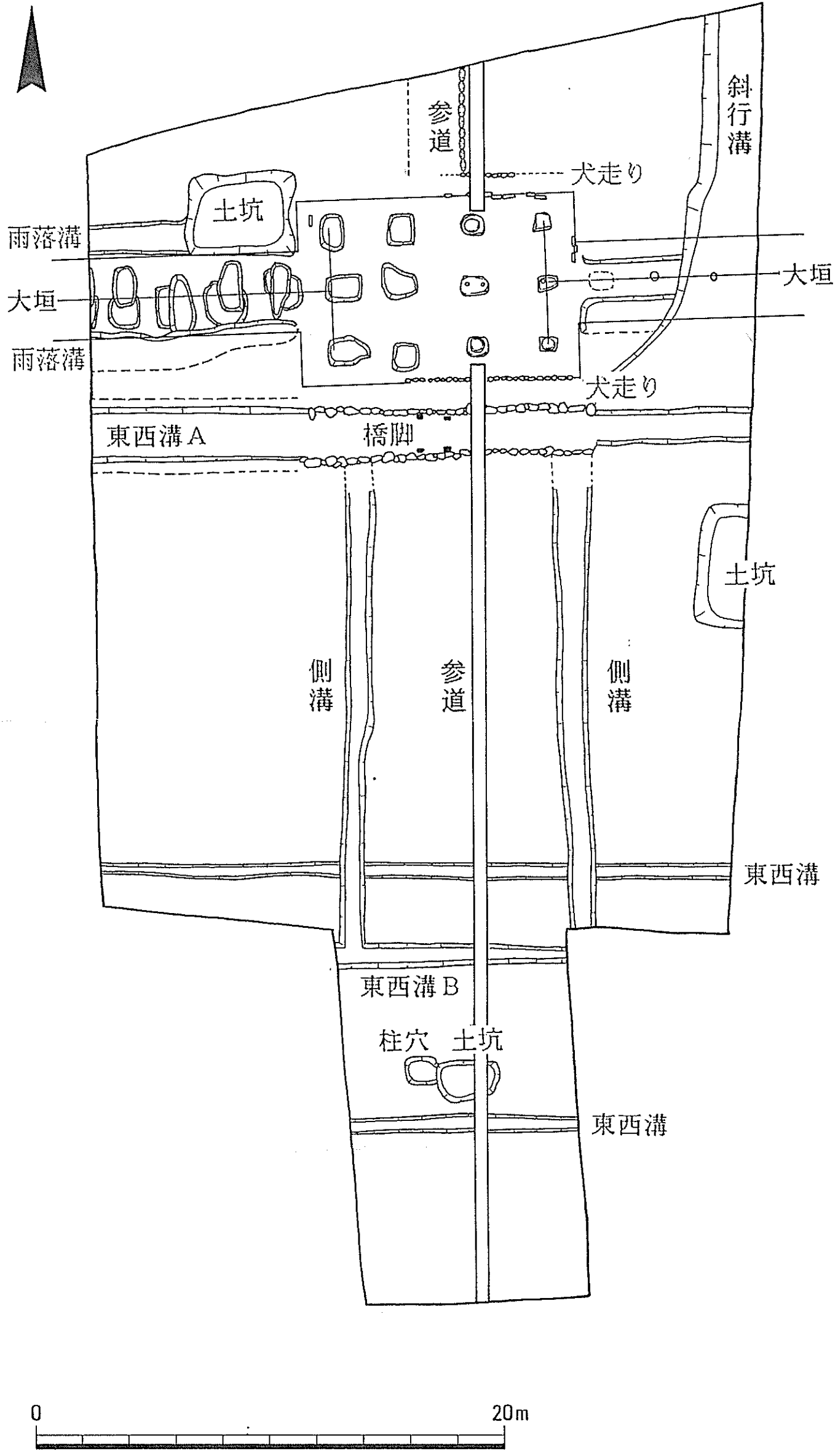
まとめ

- ・南門は礎石の形態や建築時の基準尺を参考にすると、塔や講堂が完成した天武朝に建立され、10世紀後半から11世紀前半にかけて廃絶した。
- ・南門の規模は別表のように飛鳥寺より大きく、川原寺よりもやや小さい。また中門との位置関係は飛鳥寺に近い形態となる。
- ・南門は単層・切妻の建物で棟通りの柱間全てが扉となる「三間三戸」の形式である。古代の寺院では類例がなく注目される。
- ・寺域は大垣心々距離で南北が185m、東西が119mとなる。
- ・「山田寺」と記された墨書土器によって出土遺物から寺名を確定できた。

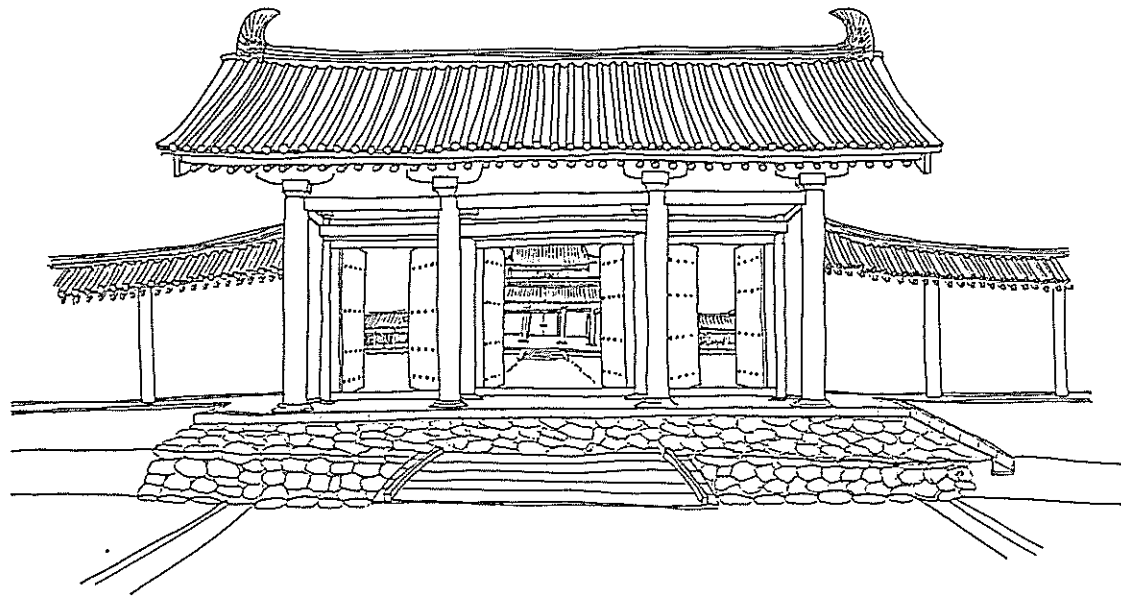
南門の比較(単位:m)

寺院名	建物規模 (正面・側面)		柱間寸法 (中央間・両脇間)		基壇規模	中門と南門 との距離
山田寺	3間(9.1)	2間(5.2)	3.22	2.94	11.7×7.9	18.5
飛鳥寺	3間(8.8)	2間(4.6)	3.86	2.46	10.6×8.3	17.8
川原寺	3間(11.7)	2間(6.3)	4.54	3.63	15×10	28.9
四天王寺	3間(10.72)	2間(7.15)	3.57等間		14.2×9.1	41.7





山田寺第7次調査遺構配置図



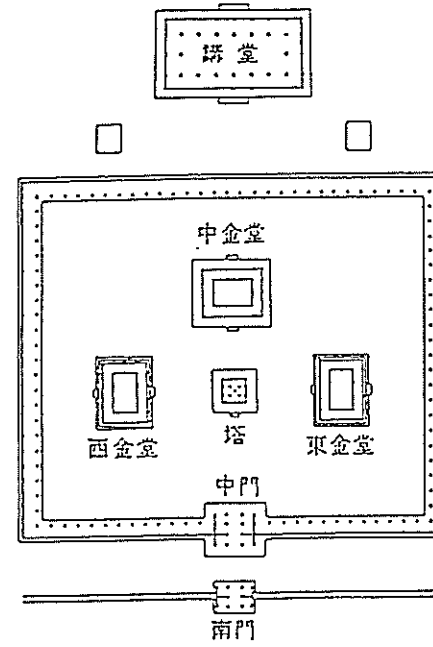
南から見た南門

山田寺年表

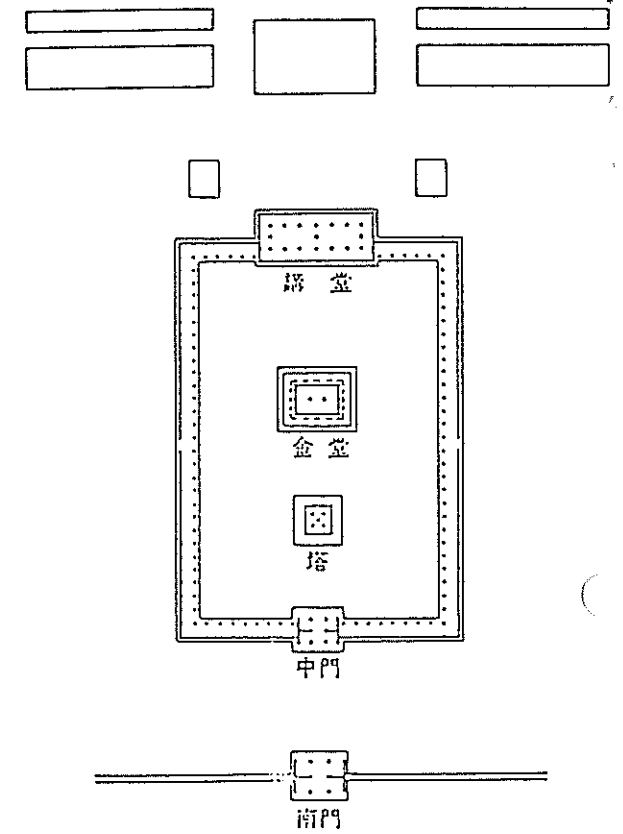
年号	西暦	事項
舒明 13	641	浄土寺建立地を定め、整地する。(法王帝説)
皇極 2	643	金堂建立。(〃)
〃 〃 4	645	蘇我本宗家滅亡事件(大化改新)起る。
大化 4	648	僧侶が住み始める。(法王帝説)
〃 〃 5	649	石川麻呂事件起る。
白雉 4	653	小金銅仏を造る。(書紀)
天智 2	663	造塔を計画。(法王帝説)
天武 2	673	塔心柱を立つ。(〃)
〃 〃 5	676	塔完成。(〃)
〃 〃 7	678	講堂丈六仏像を鑄造。(〃)
〃 〃 14	685	丈六仏像開眼、天武幸す。(書紀・法王帝説)
文武 3	699	30年に限り300戸の封を賜う。(統紀)
大宝 3	703	山田寺など33寺に齋を設く。(〃)
8C'前半		回廊の中を瓦敷で整備する。
天平 11	739	大般若経を一部浄土寺に置く。(大般若経奥書)

備考： 法王帝説 — 上宮聖徳法王帝説裏書

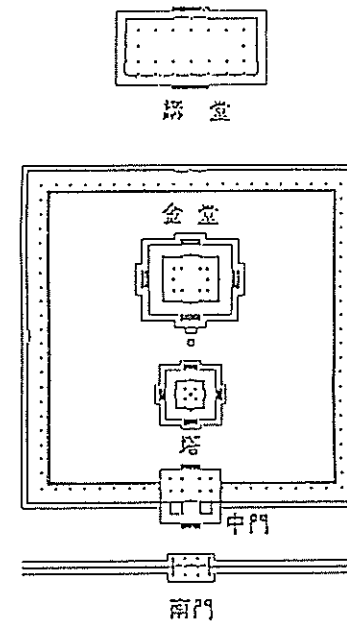
古代寺院伽藍配置比較図
(1:2000)



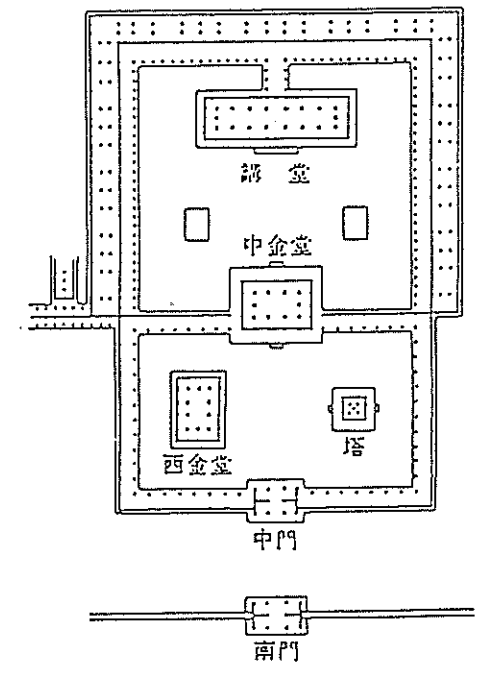
飛鳥寺



四天王寺



山田寺



川原寺

